

エレン・ケイ

「児童の世紀」を読む(2)

—「子どもの固有の世界」を尊重すること—

津守 真

エレン・ケイが、『児童の世紀』を出版したのは一九〇〇年であった。彼女は二十世紀がどうなるか未知のときにこれを書いた。それから九十六年を経た現在、歴史の中で私共はその答えを見ている。二十世紀前半の新教育の台頭は児童の世紀にふさわしいものであったが、二度の世界大戦、それにつづく歴史を経て現代の子どもたちの姿をみると、二十世紀を「児童の世紀」と言うのにはためらいを感じる。

二十世紀の子どもの中に育てたいとエレン・ケイが強調したことが二つあったと私



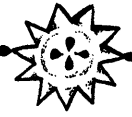
は考える。ひとつは前号で紹介した「未来への意志」である。もうひとつは、「子ども  
もの固有の世界」である。そのいずれも、単に二十世紀の課題であるのみでなく、世  
代から世代へと引き継がれる人間の教育を考えるときに、人が共通に思い浮かべるイ  
メージと言ってもよいのではないだろうか。

エレン・ケイの言うところにいましばらく耳を傾けてみよう（ここに引用するのは  
すべて私訳である）。

「子どもたちと遊ぶことは偉大な芸術（art）である。子どもたち自身がしようとし  
ていることを知らなければ彼らと遊ぶことはできない。それは大人にも特別なたのし  
みを与えてくれる。そのときに大人はすべての教育的理念を忘れなければならない。  
そして全く子どもの思考と想像の世界にはいらねばならない。昔ながらの満足を与え  
る遊び意外には何も教えてはならない。」

私のことばで言い換えるならば、子どもが自分からしはじめる遊びに子どもの  
固有の世界はあらわれる。だから子どもがしようとしていることを洞察し、子ど  
もの想像の世界にはいることが、保育者には要求される。それには大人の観念の  
中にあるしつけや教育の理念を念頭からはずさねばならない。

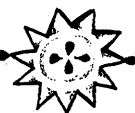
「子どもが小さな躓きをしたただけなのに、大変なことをしてしまったと思う習慣に



陥ったとき、それは太陽に一瞬かかる雲のようなものに過ぎないと、子どもがほほ笑んでそれを迎えることを教えるのは、私たち大人である。不愉快な義務にも快く直面している親を見ると、あるいはまた、厄介な出来事や不意にふりかかる困難を耐えて生き抜いているのを子どもが見るとき、子ども同じように振る舞うようになるだろう。これが私の教育法のアルファでありオメガであるから、最初に述べたことを繰り返そう。子どもを平和の中に委ねなさい。できるだけ干渉してはならない。粗野で不純なことから遠ざけなさい。人生と人格と現実のありのままが子どもを訓練するのであることを、あなたのあらゆるエネルギーと配慮をもって示しなさい。」

大人と子どもとは、生きている舞台が異なるけれども、そこで出会う危機と躓きに立ち向かう自我の力は、いずれにも共通である。子どもは生きた現実に向き、身近な大人の人格にふれて自らの人生をつくる。そのときに大人の常識的、教育的干渉が子どもに生き方を教えるのではなく、大人自身が高貴に生きていく姿が子どもの手本になる。また、子どもが生きる仕方に大人が教えられるのである。

「ある風刺作家の疑問。子孫はわれわれに何もなしえないのに、何故われわれは子孫に対して何かをせねばならないのか。この疑問は私の青年時代に考えた真面目な問いであった。私は、子孫は父祖に対して多くのことをしたと考える。父祖は、日常の限

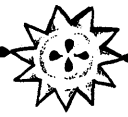


界を超えて未来への限りない地平を子孫によって与えられた。われわれは子どもの中に人類の新しい運命を見る。われわれは子ども魂の細い糸を注意深く扱わねばならない。それはいつの日か世界の出来事を織り出すことになるのだから。子どもの魂の深みを徹う滑らかな水面を割って投げられるひとつひとつの小石は、幾世紀にもわたって波紋をひろげていくことを認識せねばならない。われわれは、父祖によって、われわれの意志や選択をこえて、運命的に、われわれ自身の存在の最も深いところをつくられてきた。同様にわれわれ自身がつくり出す子孫によって、われわれは自由な存在として人類の未来の運命をある程度規定する。」

「十代も以前の父祖から私共が引き継いでいる心の深層がある。逆に私共は未来の世代を望み見るとき、そこに引き渡していく自我の力によって、新しい未来が切り拓かれていく地平線を遙かに見ることができ。その希望が私共の現在を支えている。」

二十世紀末に考えるとき、私共は未来の世代に対して殆ど不感症になっているのではないかを恐れる。それは若い人の理想を圧死させるような時代に私共が生きたからであろうか。それにもかかわらず、未来に目を開いて、地平線に光を見出そうとする意志がなければ、教育と人間の仕事は成り立たないであろう。

「これらのすべてを全く新しく認識し直し、発達という宗教の光に照らしてこの全過



程をみるとき、二十世紀は児童の世紀となるであろう。このことは二つの仕方でも実現される。まず大人が子どもの性質を理解すること、そして子どもの性質の単純さが大人の中に保存されつづけることである。こうして古い社会秩序は革新される。」

「心理学的教育学は豊かな先輩をもっている。ソクラテスやイエスにまでは溯らないまでも、現代から始めよう。実り薄かったルネッサンスの日の出の時につづいて、春の花が枯れた木叢の中にあらわれた、教育の革新への要求は、モンテーニュという偉大な人物によって提出された。彼は現実を畏敬する懷疑論者であった。彼のエッセイ、ガルソン伯爵夫人への手紙には未来の教育のあらゆる要素が見出だされる。」

それにつづいて、コメニウス、バセドウ、ベスタロッチ、ザルツマン、フレール、ヘルバルトなどの名前があげられ、更に、プライヤー、ヴント、リボー、ビネー、クレペリンなど、古典的心理学を学んだ者には懐かしい名前が並ぶ。

この書物の出版が一九〇〇年である。それから九十六年の間に、心理学の展開には目覚ましいものがあり、その業績を数え上げることが不可能である。

エレン・ケイがここでほとんど宗教とまで言った「発達」は、二十世紀に教育を語るときには欠かせない語になった。そしてそのメリットもデメリットも私共は経験している。



私がしばしば引用する『幼児期と社会』（みすず書房 一九五二）の著者、エリック・H・エリクソンは、一九〇二年に生まれ、人間の生涯の発達をテーマとして研究し続け、その最晩年、一九八二年に『ライフサイクル、その完結』（みすず書房）を著して数年前に亡くなった。二十世紀を生きた発達研究者である。この最後の著書で、彼は、老年期を特徴づける「統合」を自分自身の生涯と重ね合わせて考え、それは「一貫性と全体性の感覚であり、物事を結合する機能である」と説明し、更に、それは乳児のときにはその世界における統合の感覚があるという。そして統合は「個人の特性であるのみでなく、人生の統合的な生き方を理解しようとする共同の性質であり」世代から世代へと引き継がれる「徳」である。更にそれは「遠い時代に、異なる追及の仕方でなされたものとの内的交流であり、……そこに遠い時代の者との時間を超えた愛も生まれる」と言う。二十世紀には、人間と社会への悲観的な材料が満ちているけれども、私は人間の中にあつて世代に引き継がれる人間の精神の力を信じている。殊に言語をもたず、身体の動きを主とする幼児期には、父祖から受け継がれた人間の基礎が常に秘められている。保育はそれを保ち育てる営みである。

エレン・ケイの『児童の世紀』を読むとき、百年の歴史をあらためて考えさせられる。

（愛育養護学校）